



三行集

特別  
~5  
6060





え 禄 幸 じ り じ り じ り  
 ち り ち り ち り ち り ち り  
 こ 色 花 ぶ の り ね ぼ ー ち り  
 り じ り じ り じ り じ り じ り  
 し じ り じ り じ り じ り じ り  
 い じ り じ り じ り じ り じ り  
 ち り ち り ち り ち り ち り



此の事とては、  
心も静かに  
暮るるも、  
みづかき  
ら、  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに

こゝろに  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに  
こゝろに

宗永甲申私ぬり  
加ゆりるなと  
柳陰を  
記す

于細集卷之一

山崎のむすめ

山崎のむすめ

山崎のむすめ

世の中をいづくや川の川らり

山崎のむすめ

山崎のむすめ

山崎のむすめ

子ねむららりしころるをば 青根 夏花

夏の火や波のごまねなるを 青根 夏花

夏花のころるを 山中醫王寺傍 通

柳 山中醫王寺傍 柳花

すこしよりの

柳花 金沢 柳花

秋のつよふきの

和文 日

山寺

松林よむとすする十夜うら 一洞

此人を蕉門のみれとす

凡雅のころるを

世の人よもき

みくゆり 五月のころ

よりねむむの

なるのあはき

のいぬともかたはみよやい

きじとあつねはら南甫と

いふこととつぎえ凡雅流

らおこふくなきふよふへ

初七日の遠藤と穂の坊め

柚のむと神おひりしき七日か  
南甫

紫母平の坊のつるきえ  
秋坊

あみまるとる船つるの帆ふけ  
白空

ちまう揃つた竹の藪腰  
呂谷

とは畑よりのりくる朝の月  
牧童

掃除涼しき門先の秋  
小枝

初草はうき喜ばれとけし歌さ  
遊吾

松のあやひよとつらふ  
甫

ちやくと志はつきあふめ取  
坊

荒神口の駕の古はら  
空

賣れとるおとまりし高ひ  
谷

いか世活して出来ぬ振也  
 梅がくのよとくを顔の只ねこの  
 丁々つたれハ隼の勢  
 浦の梅泊りくくく月見して  
 お極吐よねもたまあぬ  
 むい只雲をひのよまのわり  
 ちこくくくく塔のやうふ  
 二  
 あんを暮よねもくくく雲の凡  
 童 谷 空 坊 甫 吾 校 童

お柔よれ志のまいるれ揚よ  
 竹て垣して玉をくきれよて  
 又ころくくく百日の獲テ  
 花の弱て是の跡あかく  
 みやけの暮みと今扱んを  
 角入てあかしくあくるをた部  
 火煙のくちハ焦るやとく  
 いひ出いりしもねをくおひ  
 校 童 谷 空 坊 甫 吾 校



親の使ふとやまよまては  
 願くやあゝみくぬ編むる  
 芝居つゝおく人の指ひ  
 下筋とりすれておこ障子哉  
 外を夕凡内へせま  
 けいんくゝもひもまきもの  
 そのよほきれぬ寫の夢  
 枝 吾 甫 童 谷 空 吾

一洞牌前

五月ぬやきのふんどいそふ  
 け入梅やあこやなふれんのも  
 けなはくす顔んをな解うな  
 さみしなはれら袖のをこさ  
 入梅あひもそやあつぬ洞か  
 り水やうませよるなまの月  
 あゝ忌やうと指ととれぬ青田の  
 枝 小 呂 牧 和 飯 百 枝  
 枝 校 谷 童 文 書 七 枝

初風をんせしころりよ別れ  
 山際  
 みしう夜も満られぬけと夜なる  
 巴弓 城中  
 郭公印ふまじしころ月夜終  
 百紫  
 世の江常りくをきんく月夜  
 十丈  
 百合のをも胡めくのもの向る  
 立推  
 る竹よ小ふもまよふ  
 秋の坊

も向る

二七日 宗龍寺より

句空

あれりりりりらみけさ月雨  
 標のものを散てはし青  
 百七  
 隣はんやすしとゆとよとて  
 雪青  
 火々消あうしとひ山下たれ  
 枝東  
 けはを乾ついで胡の月  
 和丈  
 ね山あふらふと龍の兵中  
 空

草子男やわらのしらぬま  
 杵子果報の志れこたえ  
 多弁てあつかのめぬまれ  
 ぬもさるるまのむら  
 初てもかいらかぬ田持は  
 とあつともさるるまのむら  
 判録を帳のむらまて田持  
 糸の世ふしよまのむら

東 ち ち 元 ぶ 東 ち ち

蚊を初てまのむら秋の丸  
 とらふはれこたえのむら  
 然る病やはし糸のむら  
 糸のむら  
 けまのむら火のむら  
 神のちらふむら  
 雲のむら  
 糸のむら

東 ち ち 元 ぶ 東 ち ち

丁うねもさんさういへ一か海  
 ぬすこ牛いさるらうぬまじ  
 教寺のあらむやう大根寺  
 宮とらゆと煤とんうす  
 城もあゝ思やこのみ便  
 今たこやう傾城の尻  
 水漬よりいさかかうを  
 雲のまよふあれてい  
 ち 東 ち 穴 ぶ 東 ち 東 ち

鴉の子もあらうとちね  
 むしを陣のあつ中馬  
 羊をいふ人となけは宥りて  
 蛇をぞうぬやうくおし  
 蝶の宿もあまきとがらの世よ  
 辰胡のつねまの入お  
 ち 東 ち 東 ち 東 ち 東 ち

ほしあみ集巻之二

冬

今あるを功者ゆふの海まう

小枝

くろくちや神子の家とゆふ

籠桃

糸子ゆふのし

初雪や茶のふて拂ふ空也堂

全

神々月

折釘よるほしうけ

金沢

志栄

このまほるふはゆふ

急いそあつてんかうはよき指と出て

神しれがぶく橋やうり

呂谷

うこの夜あ

おんて待や小橋のこ

松緑

醫王寺よ

福あらしめ松と流るやが

山中

三枝

糸のむのおよはせりみきさい 十二 巴字

一ち吹くふりかたけくやんそけい 金沢 百紫

木はきまひまよかろ枝の香 香 小人

風は吹れてる川やわん山 金沢 小枝

おしよまじくあかひん子 金沢 枝木

一枝亭子曉柔と考て

あつて紫の十らよあつあつ 日 玉芥

海ありの山くは中あつれ 日 百屯

波よしの結線やらのひま 松白 莖烟

とんせ帯りらいらん人のり

アノアヒク

あつて年や井月のやうな中 和文

葉造りやういぬかあひ 柳

いんあはあらく 金沢 納下素

あつて中よもふ大信と行ひて

らういんよまてても紙子のな 志榮

顔つきと顔てんまうや神女寺 信 冬水  
か福来とらううや羊の乳 金沢 文志

ら波のうら さあさん 山

いり男と月俵一 て 飛脚流 日 宇文

ふく す と ぬ 糸入 庭 子 糸 糸 言 日 桐之

一 よ こと と 証 と 梅 よ あつ こ 餅 山中 桃妖

おまのうま

おまのうまのうま こ ぬ し ぬ  
おまのうまのうま こ ぬ し ぬ し ぬ し ぬ  
う ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ  
の ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ  
と ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ  
ま ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ  
お ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ  
う ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ し ぬ

これぞまじあはれなるまじあはれのひびきと  
うけくゆらむまじあはれなるまじあはれなるまじあはれ  
ゆれとねあはれなるまじあはれなるまじあはれ

あまのこゝろ

あまのこゝろのまじあはれ

まじあはれのまじあはれ

句室

千細集巻之三

春の部

松梅や奥ををかゝの春くらら 大野漆神主 英之

うらひすや正月と一尾山まで 金沢 雨青

ささやをいひさるるをいひ 日 山隣

うらひすやひさしは梅のを 和丈

雪の上をよとけらるあまのひ 桃妖



うみすやに二かつはゆりき あはれ 海人

電よまよとむくみ

夏夜のすけいよ梅のあひび 山中 自笑

月夜庵より

五加木葉の白ひもやし 朧月 桃妖

うつろひのつらみ

ふみ草刺しよこもは 金沢 信三 南浦

信よこつれ

ふと世をぬをら 歌くや 娘の歌 あはれ 朱拙

冥居の人ととめいひ

こころ葉やしきり世にまなめ あはれ 全

あはれのあす

あはれすくとやのあ

あつこのつれさぬーや 雉の書 全

大のあはれとあやうや 猪の書 あはれ 路青

鳥備やうよふく あはれ

あしりつとや

谷一や夫のやうなまのきしのか

宇史

野田の寺よ一徳と

あしりて

おとろしい竹まきのまなまのけ

金尺

可應

山寺のうねのこつとや雄のけ

富山

炭里

うらひすのおねらふりてやい山

寒牛

この種やおとこつとまのぬ

志宗

まのぬまきとんぬてをまのぬ

松本

道中の吟

まゆ尾とのこすは底の余情が

十丈

おととたとりて

富のひととさつとまを産が

和史

細中ハ川の山寺よ加行しと

ゆきはあつきの垢離我宗

記念のらと

この肌は清く氷やまきのいろ テ 冬水

あいらしきまてしりはのさる

あはれ(ま)んむらうのまき

あつらふゆいひのまのぬ 全

お谷の寺もゆりて

里のまゝ人の句やうもりの能 柳色

あやうーあまうりて

山石はよあつらふまの松の枝うも 桃妖

う浴へまうらうとて丸山ま

覆く鼻てのそくやまのま葉 宇文

又通

伏見の奉堂ととひあうりま

あ(あ)うらうーえあうりぬま

けういものまぢやうあまを竹田あ

いひま

利はら所へ

一節のたてもなほけのま 京 明水

残照軒の信友元云をわくの

人よまほきていづへの日継緒

まじくその日中あつてやくくゆらぬ

さりり霞てえいふぬよしひやあつめて

川のよ昔よりあまのちか後まつく

をどつゝ露の海りやのりのり全

曇りのこころうらうらうちはれて

むじやねじは岸のぬ珠な 羅桃

うゝ野ま

山伏のは蝶と松やものこと金尺 如露

しほぬつてむよまのひ忍門の内小松

只もろとく人あこころやもの陰金尺 羅丹

山行

谷とこの家さやくしむの中 牧草

山中より丸園ま

大内谷より下ま

陰印つへはまよかり道さくら〜  
三枝

鳩の巣よ〜  
一琴

一の俗士女のよりひき〜

書〜と推乃ある〜

そのうき〜

常樂金言の目あり

情も云弥のちりき〜

や喜〜

是らやと船遊の鼻くら〜  
白室

死生元有命 福貴自由天

此是古人語 我今謬非傳

惣明好短命 痴骸却長年

傾物多賤宝 醒々漢無錢

〜

〜や山櫻 路通

千細集巻之四

夏

蝶もよぎる追分やあらもこゝろ 從吾

月をのあつとすさほほ 宇久

雲水とわくやて 松緑

らまぬ中

けはの杖あし 松山

齒とえく胡の仕るや杜 立推

のねりよ 山隣

金府のゆりしは

從吾亭より

草のり 二川

京のゆりしは

さし 白兎

おきしは

客路の歎もえきし思ふ家うれ 柳唯

金蔵とさうらの一里とらりの市と

りふ里あり入石たのこまい懐文をよせ

ふやのふとの西のこまお山徹通

和尚の骨塔あり永平三代伝安和尚

の造青も口ふみ納りゆるとしとた本

ふのふよきとらあひてはもはつとふん

古墳やをほねあこれいんとも 宇文

あさ野の一枚亭うま〜

深さとぬれてまらやぎらしく 牧童

結つりけき〜金沢かたれんら落す 孫光

涼さや水のふれのひ〜のを全 和永

淀野う〜ぬれて出るや高蒲羹 柳唯

まらとら世話の中ら田うへ全 自笑

おてちほらるやほれてまら雲 淡吾

ふらふらまら出る栲のやらら全 松縁





形各よまよはさく今井写と

舟は竿さして

夜うすはらう橋や雲の尻

籬桃

葦小舟更やうつく湖は実のりき

金沢 毒子

小坊まの腰しけてわら雪尻うま

可推

切妻の世子はさくまてあつさか

百屯

六月や麻也りの山れ秋

富山 桐井

路まゆくは赤ちの

まくとらうとら

一凡はおらうま尻の白ひうま

百屯

上西果とことくよ加藤の

アタラシ川のかかり

志れ人ありさか

いよいよきれをれもアタラシのん太

全

矢橋のる兼子とあはねて

むこく志賀の新茶やぬふ

全

志賀津のし別と尋伝れ  
 折う 東武へおむいこふん  
 あらけ知月尼子息教を海  
 中へは越うしりつふまふ  
 海へゆきこのうりこりさよん  
 ちくさか教とアセから海の龜 知月  
 こまへ涼しきまの川の跡 百毛  
 山里まゆりん

夕ぐれ

夕ぐれ

夕ぐれ

夕ぐれ

元禄癸未越中大岩山紀行

句空

さ目下の百金符を此の言ふは海虎は  
今も動は流く所はぬありて川を真うは  
おもしろくおのぬく訪ひもつと詠言も  
いさふれては具

大岩の旅は是るは月

廿四日 海をぬれにぬるまゝと  
金中の吟

三流の雲はかくれ野のさ月

廿五日 大岩山のつりて目石を  
あまうしは中子野話にまのさう  
大岩山  
海の水といふは金符をいひぬれぬ  
るもつ絲ゆりけ中子の白海の水の  
さう  
下はゆり去の七月廿六日の夜  
加増のさ月

ふうり一里はうりのくまなねらの谷とらふ  
 の百社の音月の堂よあがりゆかきまなよけ  
 山の麓のついでなまありその根うり水  
 出しその水ようきく眼よあしあきいよ  
 ぬくしあつこちのいよ昔よゆきせん  
 廿七りの境ぬききつねんぶのらふ音月  
 あれり十方もあがりききくと廿七の大山山  
 のゆつりよまも麓のあがり人むらり飛ら

ちつこも船つてきものまらねらよと引腰を  
 押くぬの木のりくつれちり古木の根  
 ともくちりもえんしう水のまらと一は  
 信ん肝よあいて洗ひたれたる忽お眼ひき  
 てはとらふ所を杖もいひまも堂ち麓  
 のゆいよあけあり飛らる人こつれもはの  
 ことしよんもゆきまなまらちまきとくつら  
 真力のありつこまきとゆららひやんぬ

新川の御宗川に龍音堂の辰己まありして高と  
あり佛のいさよとやちよちよとたひたへし御  
よひまのたひのまひくもいりなし御へ  
およひまのいりなまありられまへし御  
よひまのいりなまありられまへし御入  
のいりなまありられまへし御入

よひのいりなまありられまへし御入

西行の御宗川に龍音堂の辰己まありして高と

あり月の一ひんかかの大かた尺八ハ  
ゆかたのいりなまありられまへし御入

あり月の一ひんかかの大かた尺八ハ

六月二カニと山の林下西田の國春も  
宿つけちを清泉割師の宗基めりて  
流の女寺に松栢枝まきりて宗基も中

由良

二精舎あり海より一黙の山麓寂寂多  
照守とらかた家出くやうくありちうく海谷  
よはききよきぎりの中よ民家あつてく

老僧の知りなきやうくぬらうりか

ておやうくあつての合よ

かんこも

例のあつてはりいさか人をもつてはうぬさぬ  
あれよあつてはりいさか人をもつてはうぬさぬ

遠くよりいさかひていさかひていさかひて  
言うけて氷見の西念するところ寺  
くぬらうりはく

け寺をねん破つてはりいさかひていさかひていさかひて  
の路は歩むひて念佛之味のた場しはさへ  
高國へ出たぬひていさかひていさかひていさかひて  
いと福んころよころとまうをへれは旅のほし  
おこころん地しあつてのたはほまうく見これ

てりねとゆふ

すて糸の何と寝よなのお

涼さやあれハ孤ぼのなしら海

和高しゆとゆひて極暑と寝よて清し

やとゆんゆれハ傷のこくりまてぬと

あいてよして布舞の湖よ小舟とくりを

て凡きこいよあてぬ

四月子も密寺の祝芳堂よ子と物とぬ

ゆらとあそぶる後の海糸とるよかりゆき

おのきさこいけはあま子貴松ありと

都をしらぬまゆすむとゆふ

山のこつれの白よかり麻ま指さし

みま月や海はさくらりとく鶴 全

海老とらとらぐなと

ワす

八日の夕まぬよしら尾の流青子と尋ねけ

西を氷入るり二里計の灘へちり金の塘  
らりそくまらり舟のりよもとのうさぬく  
もさう先りよるるのんさうりくさうりくち  
はれと青あふ三里とあふ佐世の二の文  
み處とますとつとねたはさそたとく  
しとむんやすくてすむ人もや一と  
んろろしりきり路青子にまん出む  
てあふひさしあけおひつれおふんこ

行

三十一

英遠のこころ

アラスチラがり人よき

あふのこ

夕ふいさうき様の

路青

花の月

昔氷見とあふさるる十丈亭

あふすといさしじつ野のり大涼

十六日江野山安居寺のち世園よ訪す

十一



ふ勤より詠者ちの監吹は下をれれはれ

とらて里アんらより也ニ村とりよ可とる

夕ふのをれちらーあやニ村

け里ハおまとの熊の印へらぬ

所と、いつてふゆりいふゆり

よらゆりむむ

念中のひ

吾親よ野ハ林ハ一とるあがり

監吹

蟬の音もこゆれて水のあてふふ勤 夫お

お居ちよのさ

なむつむら後のあや杖のこむ

け詠者ハ白蓮の居がら

よて海ハまはらん

甚この世ふよめうとい風のまねむが 監吹

門の力士の運を

やむの代よめふおお

新  
きくくまきまき

つく換してゆくと取住

は下毎具正られらとや

こしはははちのちの秋の坊

古寺の仁王のゆびすくれが

いふあしとよとやみきじ

又いそく

な瘦とすら。仁王のあら骨

申の糾さるやまふとあそ

又る勤まゆら

客さる寺のさきりや早の敷院主音吹

十八日ふ勤らまの持次の新信何うの

坊らまらるを身行

松のちも

そらふはふかひんぬ松

穉の部

秋もさや調子さあらし 凡のそ 十丈  
 水々よのあしまよあらし 一せあらし 雨首  
 雲ひくすよ入りや秋のそえ 立推  
 いけあよひりれて照やこりの月 山隣  
 みづ月よ星もさあらし 浦の 東史

松凡よついでまらるや秋の雲 二人 一洞  
 胡ろもや月のそおりに青のほ 柳唯

蛇のむすくさうん

あさねやまの蝶のまへむつらぬ 可推  
 胡起や竹とくふれて余所とまらり 百七  
 穂原や夕とくく牛のしむら 玉芥  
 鴉の子はけあしりう浪河 富士 一庸  
 星合や鏡さる橋の夕と鳥 桃妖

七夕子ねてりけよ 百りわ  
ふれこの夜ぬきてしむ橋の上  
みあられて早のあや夜をえれぬ  
麻ののこ杖やん家の花のこ  
全

十六日午の刻

聖具や馬とんやうじさき夜  
いふれやうこけ月よちりて  
牧童

人よまねれて

常盤木の中葉月よ月夜  
志保

水の精あつてくまをいづく  
園子黙をけしんこ月  
かむあめのあるまもむあ  
とやうかここの月かん

了らるし

行

五

夕月やと暮月をいぬははるま 宇文

しむるまをいぬははるま

暮の夕と暮の夕と夕

いさよひの介別あつる月又うま 白室

死尸も指別と暮やほの月 和丈

十と夕又夕のし

あつる二白

矣と夕暮等もまゝぬははるの月 羅桃

汐月や尸の夕と夕ははるの月 全

永末古の漢堂よ

ひよちの夕は夕子肩とあつるま 自矢

蚊の夕と夕は夕月や尸の夕 可哉

まぢるも喰て暮るるかしら 桐井

魚の夕と暮人らや夕しる 小人

虫の夕と夕と夕と夕と夕と夕 夜嘯

行

廿六

ついでに寺の事

如行してはすは師の事

田とあつす藤も部むはの門 明水

松の尾よらふ

松の尾よらふ

松の尾よらふ

松の尾よらふ 松の尾よらふ 松の尾よらふ 白空

松の尾よらふ

三寸の香も松の尾よらふ 中や松の尾 百景

力のくも松の尾よらふ 志業

西風よ松の尾よらふ 小枝

草花よ松の尾よらふ 松の尾 松花

うー松の尾よらふ

うー松の尾よらふ

松の尾よらふ 白空

松の尾よらふ

つたふりしてはひちちとよ

ふとふとふと

里木や鶴追色 夕日寺

全

とのく句あり

寺くまふよ雲草の新迹しら

百七

夕日す山や鶴の草くづら

可推

草物よふりあやや茶師を

和水

初草よくぬく石のくさざ

柳雌

初草やきつてくたて 歎へるる

志景

草物やらんぬのくたて 芝の上

松縁

草物や只をすつねをひよの

籬桃

草のりやいらふよとむさこれ

宇文

いづつんけきさるを鬼の首

やうらうらふ花をすれ

ふよすてねけぬやまきり

和文

夕日るの奥あふくく入る

信行寺... 古跡ありぬ心ち純  
く中興を千五百高く... 也  
し寺は建昔... けいりう... けい  
十人... する... の大... する... ぬき  
軍裏の... おの... 手... 横... けい... けい

草おや

あのですりこい... ぬ

ぬき

すりこい... ぬ

訪原若

錫ひ... の... り... の... あり... ぬ

ぬき

穂のくれ

穂し... ぬ

ち... ま... ぬ... ぬ

後牛

ち... ぬ



山中温泉

加州江沼郡黒山をた山中村の温泉は天平  
年中泉初菅原寺の行基菩薩の  
まじまじのゆきとふまふはね下り  
お地にて静山よりけんとつげあつて  
んふの温泉湧出するら湯つらと  
しききてはあま湯のふけきしきり

中長九寸の茶所の像とよはませしゆい  
湯金の三階は安直しゆふは平、特門  
及逆のつじ湯と特す茶所の像と中  
まうりれゆき建久の中長谷部信連塚  
とらふあま君はしゆらあまはしゆら  
入る白湯にぬしゆらあまはしゆら  
ゆきなれはきとひしゆらあまはしゆら  
うりてふしゆらあまはしゆらあまはしゆら

より温泉涌出より信連行基のむしり成  
りひびくとのおとほしきてん流のなりの像  
出た後しゆつとまきとくおひひびいて舟具次  
才子船中景の地とされたり得たりとる像を  
堂と建その中置りし像との醫王寺に  
れりし景をまきとくおひひびいて舟具次  
おとまきとくおひひびいて舟具次

### 湯治の法

茶師如來と信しなるとふとあるひのまき  
らよひまきとくおひひびいて舟具次  
湯に入るや一日よるなまきとくおひひびいて舟具次  
よるまきとくおひひびいて舟具次  
へりし湯よまきとくおひひびいて舟具次  
入るまきとくおひひびいて舟具次  
入湯のなまきとくおひひびいて舟具次  
へりし湯よまきとくおひひびいて舟具次

あゝと氣して目とせむくしす湯を  
 うぶとそひくすすー歯よりーのむゆ  
 そあつはあゝ胸中とてむゆあつ  
 塩酒のさしを林さき志し酒の旗のみく  
 さみさあてといふさむたはせわうさく  
 ぼのうたの両湯は入るまあゝと碎と  
 さまーて入ぬさく  
 湯の中まてさあうさういふ奇あゝあゝ

はくくと氣するまあゝ  
 湯よりあがりてその湯かくとゆへさあゝ  
 ことすーゆへこのまて飛んぬ人いふ毒  
 あつとさあ毒く  
 せん大むねかくのさーうーか  
 やうーの湯あゝさうさあゆへさ  
 醫王寺のゆりてまゝくへー  
 まのの秋九月のさう先山中子ゆりね

拙妖ふまへ字右のはまりてゆれはらぬ  
おすまひひり入られはるきよりかくはる  
とらるしのと枝拙妖を移入るりよと  
あつひて中くこれのあふりはんやすり  
一り陽上傳て水きしめぬ  
のりやはるる子凡多とゆへ  
ふとはくす

権ひりよはめてよさやふまを  
白堂

はねのうちやとれとふまへより  
まあり  
全

ふ中の菊の白とし湯の白  
全

ふ中よまやまへる句

菊の目みくとはく湯の白  
うやまへくとりちす

菊の座さられは月の  
あつひは  
まね  
養牛

胡鬼の子の言ももりや秋の凡

全

やぶのこねし〜

早〜こねら

物脊の強やしやく喜印うな

正秀

昨ゆつと〜か〜こ〜あの子けみり

支考

浮香子ハ山中の名物

山中ハ景之由

〜瀨渙火

う〜火の〜瀨ふ〜し〜谷の奥

自笑

落結や一〜る〜の枝の音

小枝

道明別月

穂房とす〜ア〜てや別月の

柳冠

〜石石楓

夕日よ〜〜〜〜〜

全

水母の結

水がしの橋のふもとにむすぢの合の流 全

あそこのついでに橋のふもとにむすぢの月 可推

温泉の佳景と

くすきや白湯なむむ湯のふれ 小枝

あそこのついでに橋のふもとにむすぢの月 自突

山中村の入口に桂清水とていふる水も水は  
涌出するありちりさか水柱のふれ清水を

慶(元)の頃の佳よきとぬすてけりぬ人もは

あそこのついでに橋のふもとにむすぢの月

けり像を換いらさるる水も地をさか

新記 兼門 祥師 作 りる水も

る善きもむすぢ 清水のまゝ 白

氣うはいてぬすぢとていふは清水 松江 柳亭

山中とていふぬすぢの流もとていふは

家の奥の山にふかきうらむとて  
ふかきうらむとて

ふかきうらむとて  
秋の風  
白鳥

目とれてこ光院とらふ  
信の柳冠松茸とらふ  
ふかきうらむとて

ふかきうらむとて

白仲光師とらふ  
洛陽蝟菜師西河院の  
昔唐流の法とて

ふかきうらむとて

老ぬれいからる  
かきね流

竹の枝よすうらむ

ふかきうらむとて

ふかきうらむとて

柳陰庵の一夜の佳句なほあのかれし好詞  
みそはかふるこひなまは秋穉の色こかりや  
かたを食ふ魚のこゝろもねあうねらひとく  
我好物をこけけいんくしとちとちあつてい  
古くくよきあそびこゝろ世をばいんてい  
毒中のおのどきあまわいんけあれ  
おとく

ちんちんもすいんはせい  
屋幸子  
秋の病陣

京町町二条と丁  
井はやとはる街  
金沢と堤町  
三ヶ谷あつてい



